

私はかつての論文で、人間の不合理性、とりわけ意志の弱さとして論じられる現象は、時間と深いつながりがあることを指摘し、ミクロ経済学で扱われる時間割引の概念に着目した。意志の弱さと時間割引の関連性という文脈では最近、ジョージ・エイズリーやヤン・エルスターらによって強調された双曲線割引の概念が注目を浴びている。というのも、ミクロ経済学で標準的な指数割引と異なり、双曲線割引は選好の逆転を生じさせ、これは意志の弱さの現れの典型だと思われるからである。これに対して私は、意志の弱さを割引曲線の形状の問題として捉えることは、必ずしもこの現象の本質を捉えていないと論じた。本発表ではまずこの点をさらに掘り下げ、意志の弱さと時間が根本的にいかに関わるかを概観する。

人間は意思決定に際して、自分にとって何が望ましいかを見積もる二つの視点を持っている。一方は、自分の人生をできるだけ時間超越的、俯瞰的に見る視点であり、これは自分に何が価値あるかを合理的、総合的に判断する視点である。他方は、その時点における現在から物事を見る時点拘束的な視点であり、これは直近に迫った物事に左右されやすい、欲求や衝動と結びついた視点である。大局的に言えば、前者が人間特有の実践理性の働きであり、後者は人間と動物に共通の要因である。意志の弱さなどの不合理な行為は、これら二つの視点のあいだに乖離が生じ、人が後者の視点に即して行為した場合につねに生じる。その意味で、意志の弱さは割引曲線の特定の形状に依存した現象ではなく、実践理性の働きと、欲求や衝動とが、異なる時間的視点と結びついていることの帰結である。

今回の発表では、上で述べたきわめて一般的な論点の例示とすべく、意思決定論でよく知られたアレーのパラドクスを考察する。アレーのパラドクスの基本的な事例はとりわけ時間に関わるものではないが、このパラドクスにはそれを時間的に展開したヴァリエーションがあり、そこにおいては時間割引が存在しないにもかかわらず選好の逆転が生じうる。そのためそれは、時間割引の着想に訴えることで意志の弱さのあらゆる現象を説明しようという見方に対しては一つの反例となる。しかし私の見るところ、この例においても時間超越的な視点と時間拘束的な視点という視点の二重性は存在し、それは行為者がこの事例で不合理な選択をするおそれがあることと本質的に関わっている。本発表ではその関連性について立ち入って検討する。

主な参考文献：

Bermudez, J. L. (2009) *Decision Theory and Rationality*. Oxford: Oxford University Press.

Machina, M. (1989) "Dynamic Consistency and Non-Expected Utility Models of Choice Under Uncertainty", *Journal of Economic Literature* 27: 1622-1668.

McClennen, E. F. (1990) *Rationality and Dynamic Choice*. Cambridge: Cambridge University Press.